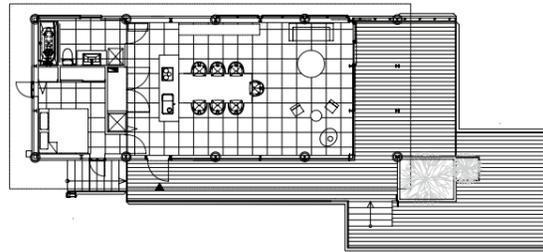


Text/Atsushi TAMADA CG/Kenta KITAGAWA (ldk) , Soma YOKOI Drafting/Reo KIRIBUCHI

FLOOR PLAN

伸びやかな一体空間が持ち味のこの建築の平面プラン。向かって左が谷の上方向となり、右に行くほど深い谷に下りてゆく。したがって図面左の木製デッキは地上からは4m近い高床式になる。実際の床面積の約2倍の施工面積によって、構えの伸びやかさが表現される。

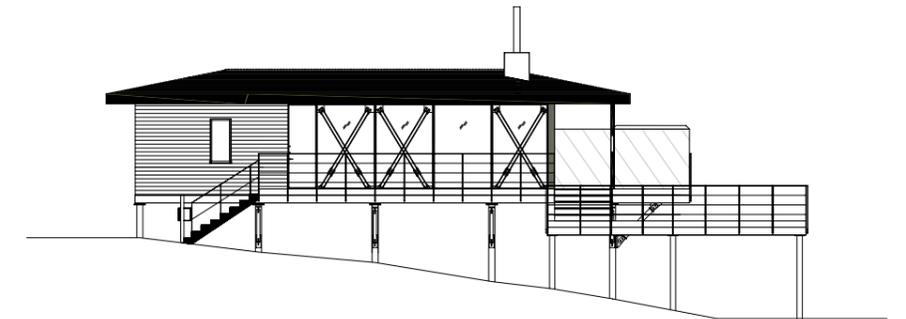


いま再び森に還れ！ 旧軽井沢高床式建築の時代性

コロナパンニックを契機に、都市化の限界に気が付いた人達は森に住み始めています。いま新たに考える。人為と自然が共生する作法とは？

デイトナが提案する
新しい建築のカタチ

DHXL
DAYTONA HOUSE×LDK



そうは言っても1970～1980年代には、都市にも幾分自然が残っていました。東京23区でさえ土の地面もまだあり、夜になれば虫やカエルの鳴き声がありました。その頃は人間が作った“人工物”と“自然のもの”が半々の感覚。それがここ20～30年で均衡が崩れて人工物以外のものを都市では見かけなくなりました。

土の地面は、いまでは滅多に見かけません。専門の学者が言うには、このペースで環境破壊が進んでいくと、地球がもたないという訳です。好むと好まざるとにかかわらず、コロナパンニックは現代人をほんの少し立ち止まらせて、来し方と行く末を考える契機を与えてくれているようです。

建築の世界でも人間の都合や効率性ばかりを基準に考えるのではなく、自然との上手な折り合いを重視した建築の在り方が、最近特に意識に上るようになりました。今回ご紹介するのは、軽井沢の鶴溜という場所に施工中の物件で、株式会社1A.というランドスケープデザイン会社の依頼で建築しています。それはすでに従来型の“別荘”という言葉では説明できない位置づけです。

実際デジタルネットワークの進化は、この場所でも十分に仕事が成立する状況に達しています。しかしそれに留まらず、“森に教わる”という謙虚なシフトチェンジが、この建築の主要なテーマになっています。樹齢60～70年の森の木をできるだけ伐らず、微妙な起伏や傾斜のある地面をそのまま残して、高床式で建築。先端に羽の付いた鋼管杭に回転を加えながら地中に貫入させ、床土台を支える構造体にするのです。デイトナハウスが「スパイキー」と呼んでいる工法。その上に鉄骨土台を施し、さらにその上にオリジナルの軽量鉄骨パネルで建築本体を設置。土中の微生物もできる限り

そのまま残す。建築そのものが地鎮祭の神事のような心境で、“建てさせていただく”というような気持ちで行っています。それは“切り開く”とか“克服する”とかいう言葉とは全く無縁の境地なのです。

計画地は沢のような起伏のある場所なので、バルコニー状の木製デッキスペースの一部は地表から4m以上の高床になり、あたかも清水寺の舞台のような有様で実に壮観です。ガラス面が多い外部に対して開放的な空間なので、リビングルームの床は樹上の枝と同一レベルになります。一種の樹上生活のイメージです。朝夕の何気ないひと時に森からいただくインスピレーションは、きっとアフターコロナの新しい時代を生きていくヒントを与えてくれることでしょう。

What's DAYTONA HOUSE ?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが軽量鉄骨のLGSパネル。厚さ3mm～4mm、幅12.5cm、厚み5cmの[Cチャンネル]と呼ばれる部材を、横幅182cm、縦270cmの長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ「ブレース」が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。

www.daytona-house.com

LDK inc. 代表 玉田敦士

デイトナをはじめ、カーマガジンの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。



- 1 二段になって立体的に谷へ張り出す木製デッキが特徴的な外観の様子。なるべく木を伐らず、木製デッキを貫いて巨木が屹立しています。
- 2 斜面を断面でとらえた画像。木製デッキがダイナミックに樹上の生活を印象付け、平屋なのに高低差を感じる贅沢さです。夜間には、まるで船で大洋を航海しているかのような錯覚さえ覚えることでしょう。
- 3 森との一体感が感じられるリビング空間。樹木の高い部分が目線のレベルとなるため、居住者はツリーハウスのような身体感覚で過ごせます。

Photo/Ken TAKAYANAGI Text/Atsushi TAMADA

DINING & KITCHEN

スチールサッシの大開口越しに、混じり気なしの海と空を望む位置に設置されたアイランドキッチン。海を愛する施主にとってはこの上ない最も贅沢な場所でしょう。美しい夕日を見ながらの調理や配膳、そして気の合う人たちの食事は生きる喜びと活力をその都度与えてくれるのです。



LIVING

ひたすら海と空を望む大開口。自然と人為の双方が作り出す直線で構成されたダイナミックな遠近法の空間。有機的な曲線形状の家具や、大型のインナーグリーンアクセントが加わって、至福の空間が出来上がります。何も語らず、何時間でもそこに佇める場所ですね。

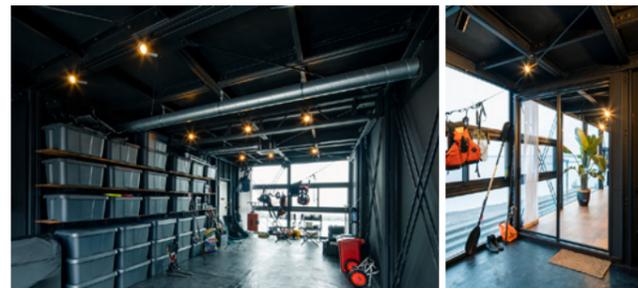
BALCONY & DINOSAUR BONE



この家の特長であり空間のアクセントにもなっている、螺旋階段を上ると一気に目の前が明るくなり、海と空とバルコニーが視界に広がります。そこは一人になれるかけがえのない場所であると同時に世界とつながっている場所。この不思議な実感を空間デザイン的には重視しています。

GARAGE

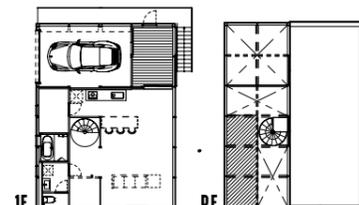
デイトナハウスなのでインナーガレージは当然に標準装備。パネルサイズやスパンを調整して、好みのサイズにカスタマイズ可能です。海辺のガレージといえば、ヒッチコックの映画「鳥」のラストシーンのガレージが想起されますね。



この建物は施主にとっては、シーカヤック・フィッシングで海に繰り出すための出撃基地としてのセカンドハウスなので、多種多様なギア類の保管場所としての機能も重要。ぎっしりと専用ケースで分類整理しています。

FLOOR PLAN

この建物のフロアプランは、平面図にしてしまうと極めてシンプルです。向かって左側が山側で道路側、向かって右側が海。メインフロアとなる1Fに主要な生活の各機能は集約されています。2Fは寝室とバルコニーのフロア。しかし、実際には高床に床下の利用可能性があり、それは住む人の暮らしの中の工夫次第ということになります。



防波堤を超えて水平線と対面せよ! 高床式リゾートハウス・サンダーボード2号様式

大開口から視線に入るのは、太平洋と水平線と青い空だけ。
千差万別の“青のグラデーション”に彩られた日常がうれしい、マリンリゾートハウスの実際例です。



デイトナ誌の連載が始まる20年前のことになります。LDKは老舗自動車雑誌「カー・マガジン」に、建築模型と仮想プランでクルマ共生住宅を考える「クルマ居住学」という連載記事を掲載していました。単に建築を提案するだけでなく、まず、メディアとしてライフスタイルの発信を同時に行う総合的なプロデューサー。その領域をLDK社はその発足当時から追及。今回ご紹介するこの海辺のリゾートハウスの原型は、20年前にその連載の題材としてすでに着想があったものです。デイトナハウス×LDKになつてからも、いつかは実現したい夢のカタチでした。

なぜなら日本の海辺には必ず無難な防波堤があり、海に近いほど海が見えないという残念な環境になりがちです。やはり大海原に昇る朝日を見ながらコーヒーを飲みたい。そうでないとヘミングウェイの心境に近づけません。とはいえ2F建ての家もなんだか所帯じみでいて、ヘミングウェイに怒られそうです。

そこで高床式にして、フロアを防波堤の高さまで上げてしまおう趣向です。その有様があたかも逆噴射しながら着陸するサンダーボード2号に似ているということから、このカタチを「TB-2様式」と呼んでいました。最初の連載当時、このカタチは技術的裏打ちのない仮想プランでしたが、その後、先端羽根つき鋼管杭の技術を応用してスピーディかつ、効率的にこの形が実現できるようになりました。この建物の完成は、デイトナハウスにとっては、20年越しの念願が結実した瞬間でした。

硬質でシャープな鉄骨フレームは、基本はマット塗装（艶消し）の粉体塗装焼き付け。色は黒と白から選択します。そのクールな素材感、黒でも白でも海や空のブルーと独特のコントラストを作り出してくれました。ここで留意すべきは鉄材特有の錆と対候性塗装の問題です。主体構造の骨組みは、外壁に覆われるため問題ないのですが、外部の潮風に直接晒されるサッシ枠や手摺などに関しては、特殊な亜鉛メッキ塗装を施します。これは弊社が長年の研鑽の末開発してきた独自の手法。とはいえ何しろ大自然の摂理が相手ですから、こまめなメンテナンスが欠かせないことは言うまでもありません。日本列島を囲む海岸線ならどこでも、この形式が着陸できるのです。

カー・マガジンで掲載したこの建築模型がルーツ

今から20年前の2000年当時のカーマガジン連載記事。1/43のミニカーの縮尺に合わせたプラ棒で作成した建築模型をプロカメラマンが毎月撮影して掲載してました。現在でもそのユニークさが際立つロングラン連載。その後オートカー誌を経て、現在のデイトナ連載へとそのスピリットは受け継がれています。





「建設現場を魅力ある職場へ」というビジョンのもとに、建設業界で働く人のあらゆる課題をワンストップで解決するプラットフォーム「助太刀アプリ」。登録事業者数は16万を越え、職人や工事会社と出会えるマッチングサービスである「助太刀」、アプリ上に求人掲載ができるサービス「助太刀社員」を中心に様々なサービスを展開している。また「令和2年度i-Construction大賞」において国土交通大臣賞を受賞、建設キャリアアップシステム（CCUS）との連携を開始するなど、建設業のDXを推進する優れた取り組みとして評価されている。

建設現場で働くすべての人を支える マッチングアプリ「助太刀」



ユーザー数
16万
事業者突破!

助太刀は、条件に合ったぴったりの職人・工事会社と出会えるアプリ。気軽に会話してつながりを広げることができます。

まずはアプリを無料ダウンロード!



出会う

16万以上の登録者から理想の職人・協力会社が探せる!



会話できる

お互いのプロフィールや案件の情報を気軽にやりとりができる!



採用/転職

建設業に特化した求人サイトに掲載や正社員応募ができる!



21世紀職人を更に普及すべく、今後はこんな展開もしていきたい!



3. 車両コラボ

- 軽トラ用パーツを販売するカスタムメーカーとのコラボ企画
- ハイエースやキャラバンのカスタム企画



1. アパレルコラボ

- ワークウェアでスタイリッシュな現場コーデ
- 別注クールベストなどを制作・販売
- アウトドアブランドとのコラボアイテムの制作



4. 写真集発売

発売するやいなや人気となった写真集「佐川男子」ならぬ、「現場系男子」の写真集やカレンダーを制作・販売。職人の世界感を、男らしくて頼りがいのある男性が好きな女性層に普及。



2. 工具コラボ

- 工具メーカーとの商品コラボし、ホームセンターなどで体験会の開催

21世紀は責任ある職人やフリーランスの時代。満員電車と同じ場所に毎日通って、一定時間決められた仕事をするサラリーマンが登場したのは1920年代です。100年経って、時代は変化します。社会性や公共性を意識できる、そんなフリーランスの自己表現が重視される時代になるといっても過言ではありません。まさに自己表現とマッチングが優位な時代の到来。21世紀職人の時代です。

マッピングサービスという時代の変化を使い倒せ!

窓口が限定的だった時代。例えば仕事を手配師経由で探していたときは、仕事を選ぶこともなかなかできませんでした。情報の出口が限られていたからです。しかし、状況は一変。デジタルネットワークの進化で登場した新しい概念の「マッチングサービス」の台頭です。自分の仕事の出来栄や、得意な仕事のパターン、仕事の躍動感など、いろんな情報をマッチングアプリ内で自分なりに表現して、求めている人と繋がっていく。単価や人工という一律の基本単位で判断されることを離れて、生きる表現として自分をカッコよく演出できる。実に面白い時代になってきたと思います。

アフターコロナに再認識される “21世紀職人”という自由な生き方

仕事の出来栄を自らビジュアルで発信することで職人の創意工夫は新しい時代を迎えます。“表現する職人像”、それが21世紀職人です。

情報流通の技術はインターネットが世に出て以来、確かに日進月歩ですが、それでもつい最近までは、限定的でした。劇的な変化はスマートフォンやスマートフォンの登場。それとビジュアル的な情報の質が、格段に上がったことだと思えます。これまで文字をベースに伝える

職人にとっての21世紀とは自由な自分の技量を売り込めるようになること。情報流通の技術はインターネットが世に出て以来、確かに日進月歩ですが、それでもつい最近までは、限定的でした。劇的な変化はスマートフォンやスマートフォンの登場。それとビジュアル的な情報の質が、格段に上がったことだと思えます。これまで文字をベースに伝える

21世紀職人って何だ? 気が付いたら今は21世紀なのに、つい最近まで実感がなかったという人も多いのではないだろうか? 20世紀と21世紀。いったい何が違うのか? 実際、身のまわりの風景は子供のころに見たSFの未来予測のようになっていないですね。クルマが宙を浮かんでいたり、好きな女の子が実はレプリカントだったり。ということはない……。なかなか見えづらい変化ですが、最大の大きな違いは情報流通の速度と、質の飛躍的な進化です。コロナパンニックが嫌でもわからせてくれたのはそのことですね。サラリーマンなのに、何と会社に行かなくても自宅にいてテレワークで仕事ができるようになってしまった!! これはまさにSF的な進化だと言えるかもしれません。

デイトナハウス×LDKが考える21世紀型の職人像とは?

仕事の奥に潜む歴史や理屈を本能的に身体で理解している職人さんは、身のこなしもカッコいい。本物のインテリジェンスです。更にそのことをビジュアルで認識して自己表現=自分をプロモーションできる仕事人が21世紀職人です。自由は自己表現によって自分で確保していく。助太刀アプリを使って、是非デイトナハウスの仕事に参加して、自己プロモーションの基盤をベースを作ってください。詳しくは助太刀×デイトナハウスのページまで。



遊動民の時代が始まる!!

